

欧州高等教育改革とフランスの大学

ストラスブール研究連絡センター

櫻井 瑠衣

## はじめに

2004年の国立大学法人化に象徴されるように、日本の大学を取り巻く環境は大きく変化し、各大学は生き残りをかけた厳しい自己変革が求められている。18歳人口減少による大学全入時代の到来、規制緩和による大学の新設ラッシュ、そしてグローバル化による国際競争は、「教育の質の保証」という新たな問題を提起しながら大学の自律性と個性化を促している。

高等教育を取り巻くこのような状況は世界的な傾向でありフランスも例外ではない。1998年のソルボンヌ宣言、1999年のボローニャ宣言に始まるボローニャ・プロセスに呼応して、フランスでは数々の大学改革が推進された。ヨーロッパの高等教育における基礎構造の標準化として、半期（セメスター）制度、欧州単位互換制度（ECTS）が導入され、学生の流動性向上のためのカリキュラムが整備された。2002年には学部課程と大学院課程に分ける2サイクル制としてLMD制（Licence（学士）、Master（修士）、Doctorat（博士）で構成）を採用、2006年までに全大学で導入された。サルコジ政権下の2007年には「大学の自由と責任に関する法律（LRU）」が制定され、大学競争力の強化、学長権限の強化、自由裁量の拡大が推進された。国際化に関していえば、日本と同様の非英語圏であり伝統的にフランス語の保護に力を入れてきたフランスであるが、現在フランスの高等教育機関では留学生獲得のために700もの英語プログラムが用意されている。

2010年までの欧州高等教育圏の創設という壮大な目標を掲げたボローニャ・プロセスは、わずか10年では完遂されず、その目標達成期限は2020年に延長された。2012年にブカレストで行われた欧州高等教育大臣会合では、とりわけ欧州高等教育圏における流動性の向上を優先すべき課題のひとつに据え、2020年までに欧州の学生の20%のモビリティを達成するという目標が掲げられている。ボローニャ・プロセスは国境を越えた高等教育圏創設の世界に先駆けたモデルとして注目され、日本においてもその内容を紹介する論文は数多く存在するが、実際に高等教育機関で働く教員・研究者がボローニャ・プロセスとそれに呼応する一連の高等教育改革をどのように受け止めて評価しているのか、その視点から論じた研究は多くない。本論文では、フランスの大学や研究機関で働く教員、研究者へのインタビューおよびアンケート調査を通じて直接の声を聞くことで、日本における高等教育改革への示唆を導き出したい。

## 1. インタビュー調査

インタビュー調査では、ボローニャ・プロセスの掲げる目標のうち、高等教育の基本構造の標準化を図った「LMD制とECTSの導入について（質問①）」、今後優先して取り組むべき課題である「学生の流動性の向上について（質問②）」、「教育の質保証、社会へのアピールについて（質問③）」、その現状・取り組みについて質問した。

(1) リヨン第3大学 (2014年9月12日訪問)

【対応者】

Mme Françoise Guelle 日本語学科講師

【基本情報】

全学生数：約 26,700 人

留学生数：約 4,000 人 (115 カ国)

国際交流：250 以上のヨーロッパ外機関との協定

200 以上のエラスムス・パートナーシップ



### ①LMD 制および ECTS の導入について

リヨン第3大学における両制度の導入はスムーズで、ヨーロッパにおける明確な共通のシステムとしてよく機能している。導入から10年以上たっており特に課題はない。おそらくフランスの他の大学に同様の質問をしてみれば、これらのシステムがよく機能していることがわかるだろう。ECTS の範囲外である非ヨーロッパ圏の大学へ留学する学生の単位互換についても、交流協定にもとづいて問題なく行われている。海外へ留学する学生は事前に国際部 (Service des Relations Internationales) へ留学先での履修計画を提出し、指導教授の承認を経てから留学する。留学先で取得した単位は帰国後に認定される。日本への留学の場合、日本語の習得が壁となり当初の履修計画のとおり取得できない学生もいるが、リヨン第3大学の卒業要件である年間 ECTS60 単位、3年間で ECTS180 単位は問題なくクリアできている。

### ②学生の流動性について

留学生の受入れを増やす取り組みとして、SELF (Study in English in Lyon, France) プログラムという英語コースを設けている。このコースでは英語のみで法律や政治科学、ビジネスを学ぶことができる。このプログラムは1セメスターのみ登録可能で、次のセメスターで DEUF (Diplôme d'études universitaires françaises) というフランス語コースを履修できる。そのほか、ダブルディグリー、トリリンガル教育など海外からの学生を呼び込むためのプログラムを提供している。一方、学生の海外留学を促進するものとしては、ローヌ＝アルプ地域圏による奨学金制度 Explo'ra sup が挙げられる。これは Licence (学士) 2年から Master (修士) 2年の学生で留学を希望する全学生が受けられる奨学金であり、対象はスタージュ (インターンシップ) であれば4~17週間、留学であれば8~36週間の期間で、金額は週95€である。

海外の高等教育機関とのネットワーク形成について、海外オフィスの設置はなく、他の大学と比べて特別なことは行っていない。フランス第2の都市であるリヨンでは、国際的な人の移動も多く、グローバル人材の需要が強いため、自然とそうした環境が整っている。ひとつ挙げるとするならば、ヨーロッパやアメリカで行われる国際会議への積極的な参加がある。こうした会議では互いに交流協定を結びたいという大学が集まっており、こうした場を通じてダブル・ディグリー・プログラムなどの話が進む。また、非ヨーロッパ圏の大学との関係構築については、メキシコやブラジルなどに学長が直接訪問するなどして、ネットワークの形成につとめている。

### ③教育の質保証、社会へのアピール

コミュニケーション部 (Service de Communication) が広報を担当しており、ホームページ、学生案内の作成や新聞への広告掲載などを行っている。社会へのアピールについてはリヨン第 3 大学ではビジネススクールの存在が大きく、また法学部において公証人や弁護士などの専門職を輩出することから、十分なアピールがなされている。

#### (2) グルノーブル第 3 大学 (2014 年 9 月 11 日訪問)

##### 【対応者】

Mme Caroline Skudder 国際交流担当職員、生涯教育課程英語講師

##### 【基本情報】

学生数：11,245 人

留学生数：約 1,000 人 (110 カ国)

国際交流：毎年約 200 名の外国人留学生を交換プログラムで受け入れている。

34 か国とパートナー関係にあり、エラスムスでは 93 の協定がある。

#### ①LMD 制および ECTS の導入について

LMD 制については高い評価をしている。ヨーロッパ全体で誰が見てもわかりやすい制度であり、大学間の移動を容易にしている。自身はこのプロセスへの移行に携わってはいないが、すべての課程において、いつでも 1 セメスターから履修できるようにするために教育内容を再考したりカットしたりする必要があり、移行は容易ではなかったのではないかと推測される。LMD 制の今後の課題は、移行前のシステムと同じレベルで教育の質の保証がなされなければならないこと、それが明確に示されることが求められていると思う。ECTS についてもポジティブな評価をしている。理解しやすいシステムであることは明白であり、まったく課題は感じていない。問題なのは ECTS を採用していない大学とのあいだにある。こうした大学とのあいだでは、単位数の変換方法がしばしば明確ではなく、グルノーブル第 3 大学の基準と異なるために学生の単位互換について困難なことがある。

#### ②学生の流動性について

学生の流動性向上のためにダブルディグリー、二国間大学協定、エラスムスなどの奨学金などを整備している。とりわけエラスムスによる流動性は高く、2014 年に発表された Agences Campus France et Europe-Éducation-Formation-France (A2E2F) のエラスムスによる学生のモビリティ (2011-2012 年) はフランスで第 2 位である。リヨン第 3 大学と同じくローヌ＝アルプ圏の奨学金 Explo'ra Sup や政府による学生支援機関である CROUS の奨学金を受けることができる。グルノーブル第 3 大学では英語による授業・コースは開講していない。留学生の獲得については海外で行われる留学フェアといったイベントへの参加、特に NAFSA や EAIE を積極的に活用している。

(3) コンピエーニュ工科大学 (2014年9月23日訪問)

【対応者】

Prof. Pierre Morizet-Mahoudeaux 教授、科学技術修士課程教育担当

【基本情報】

学生数：4,450人／エンジニアスクール、250人／Master（修士）、300人／Doctorat（博士）  
国際交流：海外150の大学とパートナーシップを締結、14のダブル・ディグリー・プログラム、  
70%の学生が海外留学、20%の留学生の受入れ。

①LMD制およびECTSの導入について

LMD制については積極的な評価をしている。LMD制度はあらゆるヨーロッパの国々に均質性をもたらし、非ヨーロッパ諸国にとっても理解しやすいものである。ただし、コンピエーニュ工科大学はエンジニアスクールであるため、LMD制は適用されていない。以前のDEA（専門研究課程、5年次）からMaster（修士）への移行については、Master（修士）の第1学年、第2学年を新たに設置しなければならなかったため困難であっただろうが、特に今後の課題は見受けられない。ECTSはセメスター単位の交換プログラムを可能にし、海外留学するうえで有意義なシステムであり、非常によく機能している。非ヨーロッパ圏の大学との単位互換については、ヨーロッパ諸国と非ヨーロッパ諸国とのあいだでバランスが取れるような単位互換制度を個々に結んでいる。

②学生の流動性について

学生の流動性を高めるために英語コースの設置、ダブル・ディグリー・プログラム、サマー・スクールなどを実施している。留学生の獲得については、中国および南米に海外拠点を建設している<sup>1</sup>。国際的なネットワーク形成のためには留学フェアやヨーロッパ大学国際コンソーシアムへの参加、エラスムス・プログラム、交流協定の締結、研究協力などが挙げられる。非ヨーロッパ諸国とのあいだでは、研究者同士、機関対機関での直接的な対話を通じて関係構築に努めている。

③育の質保証、社会へのアピール

コンピエーニュ工科大学は学外メンバー（何人かは海外から）を含むコミッティを有している。コンピエーニュ工科大学の教員は国際基準に合った研究者が大半である。どのように社会への教育プログラムの適合性をアピールしているかという質問については、学生への投資がもっともよい指標となるだろう。コンピエーニュ工科大学はフランスのエンジニアスクールでトップ10にランクインしている。

---

<sup>1</sup> コンピエーニュ工科大学、ベルフォール・モンベリヤール工科大学（UTBM）、トロイ工科大学（UTT）のネットワークにより、2005年2月14日、中国・上海に上海大学中欧工程技术学院（Utseus）を創設した。学生は上海大学中欧工程技术学院で3年間専門教育とフランス語を学んだ後に、上記3つのフランスの大学のうち1校で2年間の教育とスタージュ（インターンシップ）を受け、フランスにおけるエンジニアのディプロムと上海大学における工学学士のふたつを取得することができる。南米では2014年にチリのジャン・ダランベール・ピニャ・デル・マル高校（Lycée Jean d'Alembert de Viña del Mar）に、2年間のエンジニア養成コースを設置している。この2年間の課程後にコンピエーニュ工科大学に進学することも、チリ内の提携大学へ進学することも可能である。

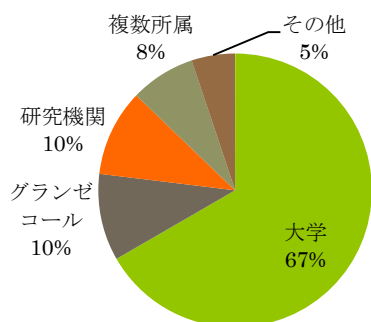
#### (4) 考察

リヨン第3大学、グルノーブル第3大学、コンピエーニュ工科大学と規模や特色の異なる大学での調査であったが、LMD制とECTSの評価は高く、非常によく機能していることがわかった。各大学において、ECTSを共有しない国とのあいだでは個別の協定によって対応しているが、単位認定の基準の違いから難しさを感じている様子も窺えた。

学生の流動性向上のための取り組みとして、英語コースの設置、ダブル・ディグリー・プログラム、サマー・スクールの実施が具体的な取り組みとして挙げられた。印象的だったのは学生が海外留学するための地方自治体による奨学金が充実しているということであった。今回インタビュー調査をしたローヌ＝アルプ圏だけでなく、フランスの各地方において同様の奨学金が提供されていることがわかり、学生の海外経験促進に大きな役割を果たしているようだ。海外ネットワークの形成については、コンピエーニュ工科大学を除いては海外拠点を持っておらず、個々の教員の国際的な共同研究や教職員の国際会議への出席など直接的な対話を通じて形成されている。

## 2. アンケート調査

より統計的な調査として、日本学術振興会フランス語圏同窓会員の協力を得て、アンケート調査を行った。フランス国内の大学・研究に所属する同窓会員412名のうち、39名から回答を得ることができた。アンケート回答者の所属について、67%は大学、10%は研究機関、10%がグランゼコール、8%が複数機関の所属（たとえばCNRSと大学の両方に所属する研究者など）、5%はその他の所属である。



アンケートでは、(1) ボローニャ・プロセスの評価について、(2) フランスにおける高等教育機関の国際化について、(3) フランスの高等教育を取り巻く状況について、(4) 日本の大学における国際化について、質問した。なお、このアンケートは大学・研究機関の国際担当者ではなく、教員・研究者にたずねていることから、実際に各大学・研究機関の正確な数値情報ではなく、教員・研究者の認識であることをあらかじめ断っておきたい。

(1) ボローニャ・プロセスの評価について

**【質問 1-1】** ボローニャ・プロセスによってフランスにおける高等教育改革は促進されたと考えますか？ (グラフ 1-1)

「はい」を選択した人のコメント

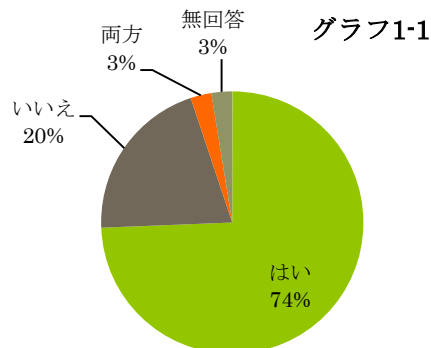
- ・このプロセスが改革の起源であったと認識している。
- ・ヨーロッパにおけるシステムの調和がなされ、交流を容易にした。
- ・ヨーロッパのレベルで理解しやすく比較可能な学位制度、単位互換制度は信頼できるシステムである。

「いいえ」を選択した人のコメント

- ・何も変わっていない。
- ・フランスにおける高等教育改革は国家の大学にかかるコストを削減する目的のような、予算上の改革によって本質的に進められたと考えている。

「両方」を選択した人のコメント

- ・国内の法整備（たとえばLRU）によっても促進された。ボローニャ・プロセスはその一部にすぎない。

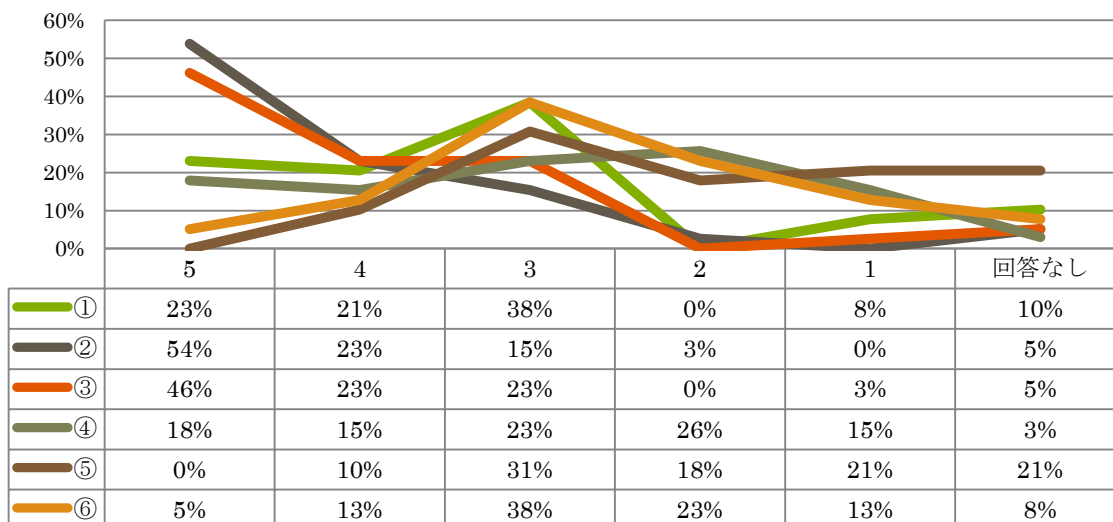


**【質問 1-2】** 今日にいたるまで、下記の各システムはフランスにおいて達成されたと考えますか？

(①～⑤の綱目について達成度を5段階で評価) (グラフ 1-2)

- ①ディプロマ・サプリメントの導入を含む、理解しやすく比較可能な学位制度の確立。
- ②学部課程と大学院課程に分ける2サイクル制の確立
- ③ヨーロッパにおける単位互換制度の確立
- ④自由な移動を阻むあらゆる障害を取り除き、学生、教員、研究者の流動性を促進
- ⑤高等教育の質的保証に向けての協力
- ⑥高等教育における欧州規模の拡大

グラフ1-2



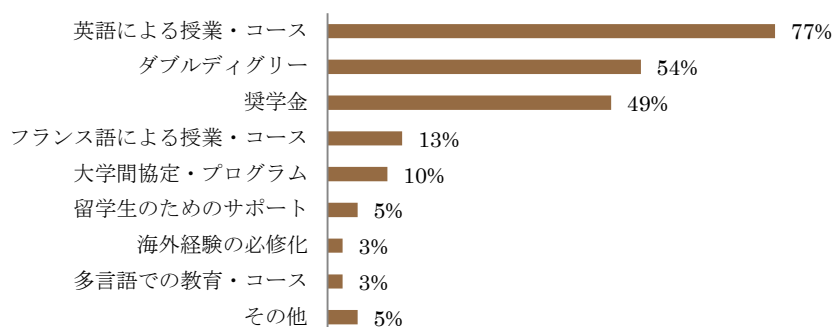
### 【考察】

質問 1-1 の結果、74%がボローニャ・プロセスによってフランスの高等教育改革が促進されたと考えており、大きな影響を与えたことは明白である。質問 1-2 ではボローニャ・プロセスが 2010 年までの達成を目標に掲げた項目についてその達成度を 5 段階で評価を依頼したものであるが、高等教育の基本構造である学位制度①、課程②、単位互換制度③については、LMD 制や ECTS などが導入され、かつ非常によく機能しているという実感があることがわかった。一方、学生の流動性④や欧州規模の拡大⑥については十分であるとはいえないと感じているようだ。高等教育の質の保証⑤については回答なしが目立ち、教員・研究者のあいだでもそれをどのように評価すべきか測りかねている印象を受けた。

### (2) フランスにおける高等教育機関の国際化について

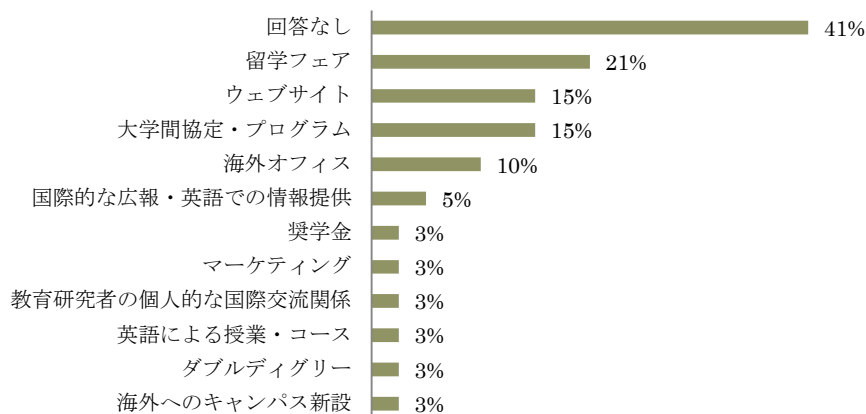
【質問 2-1】あなたが所属する機関では、学生の流動性（受入）の向上のためにどのようなシステムがありますか？（複数回答可）（グラフ 2-1）

グラフ 2-1



【質問 2-2】あなたが所属する機関では、留学生を獲得するためにどのような広報を行っていますか？（複数回答可）（グラフ 2-2）

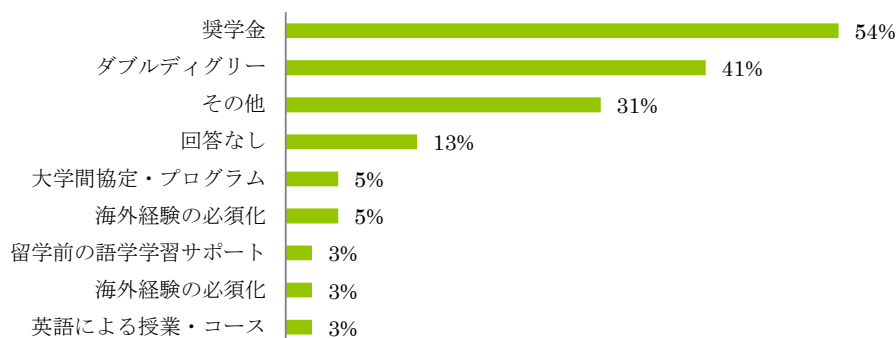
グラフ 2-2





【質問 2-3】あなたが所属する機関では、学生の流動性（派遣）の向上のためにどのようなシステムがありますか？（複数回答可）（グラフ 2-3）

グラフ 2-3



【質問 2-4】あなたが所属する機関では、教員・研究者の流動性（受入）の向上のためにどのようなシステムがありますか？（自由記述）

教員・研究者招へい制度、エラスムスやヨーロッパにおける各種プログラム、大学間の二国間国際交流協定、国際的な公募による教員・研究者の採用

【質問 2-5】あなたが所属する機関では、教員・研究者の流動性（派遣）の向上のためにどのようなシステムがありますか？（自由記述）

サバティカル制度、エラスムスやヨーロッパにおける各種プログラム、大学間の二国間国際交流協定

**【考察】**

質問 2-1 では学生の流動性（受入）向上のための取り組みについて質問した。回答者の 77% から所属する機関において英語による授業・コースが設けられているとの回答があった。ダブルディグリーの導入、奨学金も半数を占めた。奨学金については、主にエラスムス、地方自治体による奨学金などが例に挙げられた。その他、多言語での教育および海外経験必須化や留学生のためのサポートの充実が挙げられた。また興味深い回答として、「英語ではなくフランス語の授業こそが海外からの留学生を惹きつける魅力である」という回答が複数あった。質問 2-2 では留学生獲得のための広報について質問したが「知らない、わからない」という回答が 41% あった。留学フェアや大学間協定・プログラム、ウェブサイトによる情報提供が具体例として挙げられた。質問 2-3 では学生の流動性（派遣）向上のための取り組みについて質問した。奨学金が筆頭であり、具体的な奨学金としてエラスムスと地方自治体による奨学金が大半を占めた。いずれの大学においても 10~20% の割合で留学生を受け入れている。国民教育・高等教育・研究省の報告書によると、フランスの高等教育機関における留学生数は 2002 年から 2012 年のあいだに 31% の増加がみられ、約 290,000 人の留学生が学んでいる（2013 年）。このうち 4 分の 1 の留学生がボローニャ・プロセス加盟国から留学しており、フランスにおける学生のモビリティ向上にボローニャ・プロ

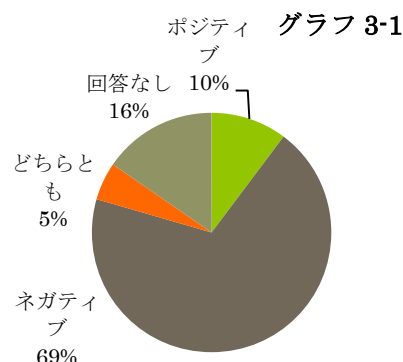
セスとそれに付随する一連の高等教育改革が果たした役割は大きいと言えよう。一方、教員・研究者の流動性について聞いた質問 2-4 と質問 2-5 では教員・研究者の招へい制度や大学間の二国間国際交流協定などが挙げられたものの「回答なし」が約半数を占めており、その流動性を高めるためのシステムはまだ不十分であり、多様性を欠いているようだ。

(3) フランスの高等教育を取り巻く状況について

**【質問 3-1】 高等教育の市場化についてどのように考えますか？ (グラフ 3-1)**

ポジティブと回答した人のコメント

- ・高等教育の価値判断の基準とその無償性を学生に信じ込ませてきた専売を制限することを可能にした。教員に学生への関心を意識させた。
- ・市場化はミッション遂行のための資金導入をもたらした。
- ・フランスの現在のシステムでは国家としての持続した教育を維持できない。



ネガティブと回答した人のコメント

- ・クライアント（学生の保護者）は知の将来を定義する最良の存在ではない。
- ・教育は商品ではない！知識は商品ではないし、商品になりえない。
- ・学生を消費者、教員を販売者と見做すならば、知識は買うことはできない。
- ・金銭と科学は常に相容れないものである。
- ・大学の価値はこのような市場化とは相反する。われわれが行ってきたことすべてを犠牲にして、ミッションの一部をも形成しないマーケティングや商業の学位の価値を引き上げるようなプロセスはまったくの無駄である。
- ・学位の認識とその授与におけるレベルの低下。
- ・(フランスで) 教育を受けるために必然的に言語知識のない学生を受け入れなければならない。学位を「売る」ことによって修了させている。
- ・フランス政府は資金の分配と大学の卓越性を一致させていない。
- ・フランスやヨーロッパでは学費は無料である。それは若い人材を確保する機会である。

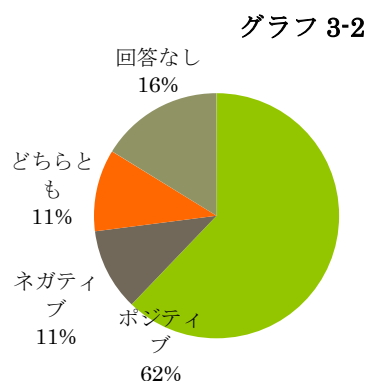
どちらともいえないと回答した人のコメント

- ・必要とは思いますが、大学の精神を守り、それに見合ったものでなければならない

**【質問 3-2】 高等教育へのアクセスの民主化についてどのように考えますか？ (グラフ 3-2)**

ポジティブと回答した人のコメント

- ・より多くの学生の教育は発展につながる。



- ・知はあらゆる社会階層から生まれる。それは貴重であり、うまく活用されなければならない。
- ・高等教育へのアクセスはそのレベルを満たしたすべての人に開かれなければならない。私自身は大学入学試験を尊重する。

#### ・ネガティブと回答した人のコメント

- ・大衆クラスへ学習アクセスを与えることの目的が逆向きになっている。歴史ある教育機関、エリート課程に比べて、それが価値を引き上げることは少ない。
- ・大学入学選抜のシステムを置き換えなければならない。

#### 両方と回答した人のコメント

- ・真の社会的向上をもたらすという意味においてはポジティブだが、グローバルなレベルでは学生が減少傾向にあり、結果的にうまく機能していない。

#### 回答なし

- ・真の民主化ではないから。
- ・いかなる民主化も目にはしていない。

#### **【考察】**

フランスの高等教育改革を考察するにあたり、世界的な動向である「市場化」「大衆化（ユニバーサル化）」は重要なキーワードとなる。ボローニャ・プロセス自体が市場化を促すものであり、フランスの高等教育改革は市場化に対応して推進されてきたものである<sup>2</sup>。また、フランスにおいても高等教育の「大衆化（ユニバーサル化）」が進み、2013年には589,400名のバカロレア合格者を出し、割合にして86,9%の合格率である<sup>3</sup>。高等教育へのアクセスの拡大とともに、フランスでは教育の機会の均等、公正さ、そして民主化のための議論がなされ、継続的な取り組みが行われている。とりわけ、経済的な問題により高等教育の機会が奪われないよう配慮している。フランスでは経済的に恵まれない優先教育地区ZEP（Zones d'Education Prioritaires）を設け、この地区にあるリセの生徒をグランゼコールに優先的に入学させる積極的差別を実施している。

質問 3-1 では、高等教育の市場化について積極的評価をするか消極的評価をするかを質問したうえで、自由にコメントを記述してもらった。69%が消極的評価を選択しており、積極的評価は10%にとどまった。ボローニャ・プロセス自体が高等教育の市場化と強く結びついたものであるが、質問 1-1 で74%がボローニャ・プロセスをプラスに評価していたのに対し、「市場化」という言葉を用いた直接的な質問に対しては否定的な反応を示す教員・研究者が多かった。質問 3-2 では、高等教育へのアクセスの民主化について62%が積極的評価を選択しており、より多くの人に教育の機会の拡大は好ましいとの回答であった。一方で、11%が消極的評価をしており、アクセスの拡大によって教育の質が低下することへの懸念がみられた。

<sup>2</sup> 大場淳「フランスの大学改革—サルコジ=フィヨン政権下での改革を中心に」『大学論集』第41集、54-76頁、2010年

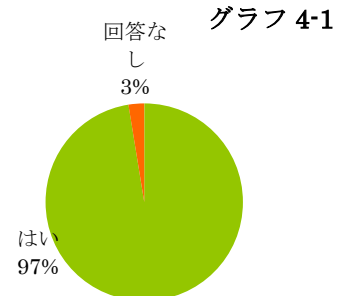
<sup>3</sup> Les résultats définitifs de la session 2013 du baccalauréat : les effets de la réforme de la voie professionnelle Note d'information - N° 06 - mars 2014 <http://www.education.gouv.fr/>

(4) 日本の大学における国際化について

**【質問 4-1】** 日本への滞在を学生や教員・研究者に薦めたいと思いますか？また、その理由を挙げてください。[グラフ 4-1]

・はいと回答した人のコメント

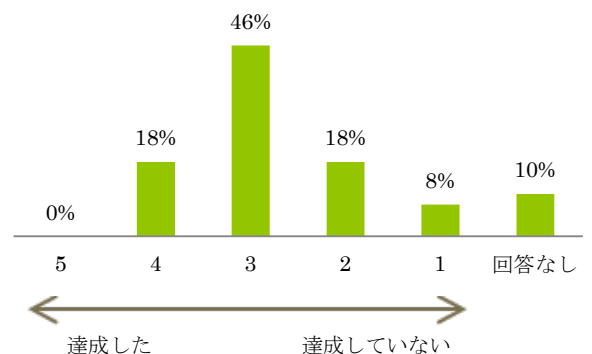
- ・優れた研究教育、テクノロジーの強さ、研究のダイナミックス、研究協力のしやすさ
- ・文化交流、とりわけ考え方についての交流
- ・異なる文化と対峙することは、固有の文化と研究へのアプローチを比較するのを豊かにする。
- ・海外でのあらゆる経験は興味深い。特に日本では資金とチームワークがおもしろいプロジェクトを行うことを可能にする。
- ・20年前のことだが、独自の文化があり、発展を確信できる国である。
- ・海外でのあらゆる経験はプラスになる。日本は魅力的な国である。
- ・温かい受け入れ、日本人のホスピタリティ。大学の受け入れ体制がすばらしかった。
- ・開かれた精神、個人的に良い経験であった。
- ・遠く離れた国での素晴らしい大学システムにおける経験
- ・日本の大学はすばらしく、異なる文化に出会うのは常に興味深い。
- ・勤務条件のすばらしさ、価値を高めるプロフェッショナルなチームのモチベーション。



**【質問 4-2】** 日本における高等教育の国際化の達成度を 5 段階で評価してください。(グラフ 4-2)

消極的評価

- ・言葉の壁が国際化にブレーキをかけている。
- ・英語での授業、コースを増やす必要がある。
- ・ある研究機関で修士課程の授業を英語で行うことになったが、日本人学生から内容が理解できないと不満があがった。留学生がいるにも関わらず結果的に授業は日本語で行われた。
- ・すでに多くの努力はなされているが、コミュニケーションの難しさが、相対的にみて孤立している。
- ・日本の大学が海外と多くのコンタクトをもっていたとしても、フランスに比べたら明確に教員や研究者の国際化は慎ましいものである。地理的な問題や日本語の難しさが要因としてある。
- ・日本語での授業、クラスには日本人しかいない、外国人教員の少なさ。
- ・自分の経験は昔のことであるが、多くの日本人が海外へ出ていたとは思わない。日本におけるヨーロッパからの留学生は文学や言語学をのぞいて少ない状況であると思う。
- ・15年間日本との国際関係の発展に従事してきたが非常に難しさを感じる。日本の大学規則は融



通が利かない。

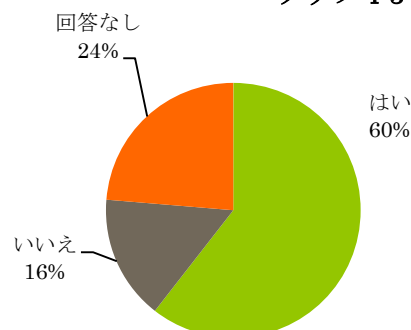
- ・学生のレベルでは国際化は実現されているが、教員・研究者にとって日本でポストを獲得することは未だに困難なように思われる。
- ・日本人はよく国際化という言葉を用いるが、その概念があまり具体化していない。一般的に日本人にとっては国際化というのは外国語を話すことになりがちである。

### 積極的評価

- ・自分が勤務していた大学では十分に外国人の受入が進んでいた。
- ・日本滞在中に韓国、中国、ヨーロッパの学生と一緒に授業をとり、同じ研究室で働く様子を見ることができた。
- ・国際化は日本の大きな大学においてはすでに達成されているが、国家的なレベルではまだ不十分である。
- ・ますます外国人留学生の受け入れは増えており、特にアジアからの留学生は増えていると思う。
- ・多くの協定が結ばれており、学生の受入・派遣に関する協定も存在する。たくさんの学生が博士号取得やポスドクのために来日している。

【質問 4-3】日本とヨーロッパのあいだで欧州高等教育圏のような共通した教育圏を構築することは可能だと思いますか？（グラフ 4-3）

グラフ 4-3



#### 「はい」と回答した人のコメント

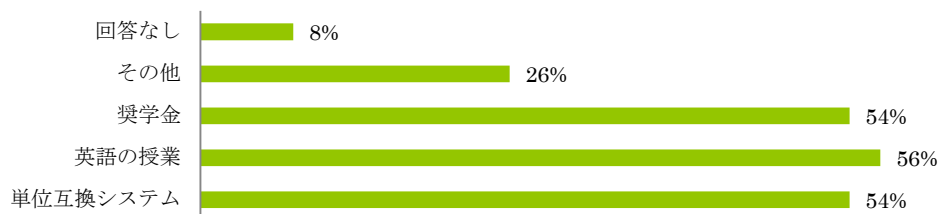
- ・日本は十分にヨーロッパと比肩しうる。
- ・日本のシステムはヨーロッパと同様であり、大差ない。学生と個々人の流動性を促進するにあたり、ふたつの文化は確かに異なるが、一緒に機能している。
- ・日本はヨーロッパの若者を引き付けている

#### 「いいえ」と回答した人のコメント

- ・それは複雑すぎるように思う。システムは大きくことになっており調和させるには困難であるように思われる。一方で、具体的なアクション、国際的な修士の学位や論文のコチュテル（共同指導）などを実行していくことは可能だろう。
- ・日本とヨーロッパは科学技術が勢いを失い、学生を失うという同じタイプの高等教育の問題を抱えている。

**【質問 4-4】 日本の国際化のためには何がもっとも必要だと思いますか？（複数回答可）（グラフ 4-4）**

グラフ 4-4



その他「学年暦の統一」、「外国人教員・研究者の採用を進めなければならない」「英語の授業の拡大は大きな誤りである。日本語の授業を提供すべきだ」。

**【考察】**

質問 4-1 では 1 名の未回答者を除いて、ほぼ全員が日本への留学・研究滞在を勧めたいとの回答であった。研究水準の高さ、日本独自の文化が評価されている。質問 4-2 では日本の大学の国際化が達成されているかとの 5 段階評価を聞いたが、達成されているの「5」を選択した回答者はゼロであった。大きな大学では国際化は進んでいるが、中小規模の大学では不十分であるというコメント、日本における高い研究水準を評価しつつも、言語の壁や日本語習得の難しさがマイナス要素として挙げられた。質問 4-3 では 60%がヨーロッパと日本のあいだにおいて欧州高等教育圏のような共通の高等教育圏を構築することは可能であると回答している一方、学年暦などシステムの違いが大きく現実的ではないとの意見もあった。質問 4-4 では日本の国際化にもっとも必要なものを聞いたが、学位制度や単位制度の標準化、英語コースの導入は当然の水準として求められている。また日本は物価が高いと認識されており、奨学金の充実も同様に求められている。その他、外国人教員・研究者の採用促進、また興味深い回答として英語での授業ではなく日本語での授業をすべき、という回答があった。

**おわりに**

フランスの大学・研究機関に勤める教員・研究者のボローニャ・プロセスへの評価、直接の声を聞くために、インタビュー調査とアンケート調査というふたつの手法を採用した。いずれにおいてもボローニャ・プロセスにおける高等教育の基礎構造の標準化は積極的評価がされている一方、教育の質の保証については十分な認識がされていないことがわかった。また、学生の流動性については、ボローニャ・プロセス開始後まもない 2002 年から 30%以上の上昇を果たしているが、教員・研究者の認識としてはまだ目標達成には十分ではないと認識されているようである。国際化への取り組みについて、非英語圏でありながらフランスの多くの大学、グランゼコールで英語プログラムが提供されており、留学生を呼び込むための積極的に展開されていることがわかった。研究者や大学職員の国際的な流動性向上はいまだ不十分であり、今後の課題として取り

組まれることだろう。

アンケート調査から、日本の大学の国際化のためには、ボローニャ・プロセスが実現したような学位制度や単位制度における互換性のあるわかりやすいシステム、そして英語プログラムの充実は必須であるように思われる。一方で、興味深い指摘として「留学生を呼び込むためには英語ではなくフランス語（日本語）でのプログラム提供こそが重要である」という声が複数あったことを記しておきたい。英語プログラムの充実は大大学が取り組んでいるところであるが、どの国でも英語という同じ言語で授業が受けられるようになったとき、国際間の競争は増し、日本で研究すること、学ぶことの意義がより一層求められる。グローバル化が高等教育の世界的な標準化を求めるとするならば、各国の伝統的な高等教育の体系や理念が失われるのではないかという懸念や反発がみられるのは当然のことである。しかしながら高等教育の在り方は時代にあわせて変化するものであり、もはや後戻りはできない。日本の大学の国際化という問題を考えるときに、ただただ欧米並みの水準を目指しがちであるが、グローバル化の波に埋没することなく、世界における日本の高等教育研究のプレゼンスを高めるためには、教育・研究の独自性を意識し、日本で研究すること、日本へ留学することの魅力を強く発信していくことが必要だろう。

## 謝辞

本報告書の作成にあたりご指導・ご助言をいただいた日本学術振興会ストラスブール研究連絡センター長宮本博幸先生、久田淳子副センター長、日頃のセンター業務を支えてくださったストラスブール大学日本委員会委員長中谷陽一先生、日仏大学会館長マリー＝クレール・レット館長、カロリヌ・ブラッツ秘書、そして、この研修の機会を与えてくださった日本学術振興会及び横浜国立大学の皆さまに、この場を借りて御礼申し上げます。

## 【参考文献】

- ・大場淳、「ボローニャ・プロセスとフランスにおける高等教育質保証－高等教育の市場化と大学の自律性拡大の中で－」、『大学論集』第 39 集、33-54 頁、2008 年
- ・大場淳、「ボローニャ・プロセスとフランスにおける修士教育」、『日仏教育学会年報』第 15 号、103-113 頁、2009 年
- ・大場淳「フランスの大学改革－サルコジ＝フィヨン政権下での改革を中心に」『大学論集』第 41 集、54-76 頁、2010 年
- ・館 昭「ボローニャ・プロセスの意義に関する考察－ヨーロッパ高等教育圏形成プロセスの提起するもの－」『名古屋高等教育研究』第 10 号、161 -180 頁、2010 年

## 【参考ホームページ】 インターネット・アクセスはすべて 2015 年 2 月 14 日である。

- ・キャンパス・フランス

英語プログラム について

【URL: <http://www.campusfrance.org/fr/page/les-formations-enseignees-en-anglais>】

- ・グルノーブル第 3 大学

【URL: <http://www.u-grenoble3.fr/>】

- ・コンピエーニュ工科大学

【URL: <http://www.utc.fr/>】

- ・フランス国民教育・高等教育・研究省

ヨーロッパと国際化

【URL: <http://www.enseignementsup-recherche.gouv.fr/pid24662/europe-et-international.html>】

高等教育について

【URL: <http://www.enseignementsup-recherche.gouv.fr/pid24573/enseignement-superieur.html>】

- ・ヨーロッパ高等教育圏ウェブサイト 2010-2020

ボローニャ・プロセスの歴史

【URL: <http://www.ehea.info/article-details.aspx?ArticleId=3>】

主な報告書

【URL: <http://www.ehea.info/article-details.aspx?ArticleId=73>】

- ・リヨン第 3 大学

【URL: <http://www.univ-lyon3.fr/>】

- ・独立行政法人 大学評価・学位授与機構

国際的な共同教育プログラムの質保証－欧州のガイドライン、共同評価等の取組み

【URL: [http://www.niad.ac.jp/n\\_kokusai/block2/index.html](http://www.niad.ac.jp/n_kokusai/block2/index.html)】